

現在、地球の生物は一五分間に一種ずつ絶滅しているといわれる。年間に換算してみると三万五千種類になる。地球に生存している生物は最大一億種類程度と推定されているから、単純に計算すれば全滅するまでにまだ約三千年はあるということになるが、そのようなんびりした話題ではない。実際、絶滅の危機に直面している生物は、鳥類で一萬種類の一割、魚類で二十四万種類の三割、植物で二十四万種類の二割といわれている。

森林火災や火山爆発や巨大台風なども生物の絶滅の原因であるが、最大の原因は人間にある。人間が毎年伐採している森林の面積は約一四〇〇万ヘクタールであり、これは一日に換算するとゴルフコース五百箇所に相当する。人間が年間捕獲している魚類は一億トンに接近して、ほぼ限界に到達している。貴重な高山植物を盗掘して商売にする人間や、魚釣りという享楽だけのためにブラックバスを放流して生態を破壊する人間も多数いる。

それでは生物の種類が減少していくことのどこが問題かといえば、多様という特徴が減少するからである。生物の世界は人間を頂点とする食物連鎖のピラミッド構造を形成しており、その下部を構成する植物や動物が消滅していくことは、ピラミッドの煉瓦が脱落していくことを意味し、やがては全体が崩壊することになる。長々と生物の絶滅を説明してきたが、話題のIT革命にも同様の問題が存在していることを話題にしたいためである。

日本でも小渕内閣の諮問会議による提案以来、英語第二公用語論が熱心に議論されているが、情報通信技術が世界に浸透していくことにより、全員が共通の言語を使用することは実用の観点からは便利なことである。現在では世界の数億の人間がインターネットで相互に通信可能な状態にあり、それらの人々が意思疎通できるためには英語を使用することが現実の選択である。そして、その傾向は着実に進展している。世界の書物の出版点数では英語の比率は三割以下であったが、現在、十億以上あると推定されるインターネットのホームページは八割以上が英語で記述されている。さらに、インターネットを使用している人口を言語で分類してみると半分以上が英語母国語圏の人間であり、それ以外の言語の比率はすべて一桁でしかない。IT社会が急速に実現していくにつれて、英語という単一の言語が世界を席卷する様子が明瞭に反映されている。

アメリカの大学の学者が発表した数字によると、一人でも使用している人間が生存している言語は、現在、世界に六千程度あるが、今後百年で一割以下しか残存しえないということである。まさに生物の世界で発生しているのと同様の絶滅現象が文化の世界でも出現していることになる。これが何故問題かの理由は明確ではない。世界各国が英語になれば利便という観点からはむしろ推奨されることにもなりかねない。以下のような理由で納得していただければ簡単である。熱帯雨林で生活している民族は数千種類の植物を薬草として利用している。当然、それらすべてはその民族の言語で命名されている。もし、その言語が消滅すれば、その民族が何千年間にわたって蓄積してきた知識は地上から消滅し、人類は再度、営々と経験を蓄積しなければならぬということになる。これでも多様な文化の意義を納得できない読者には以下の引用を提示したい。

「世界を電子ネットワークで一体にするという思考は精神の大量絶滅を意味する。人々は熱帯雨林が消滅し多様な生物が消滅することは心配するが、知識の多様はどうだ。それは樹々より急速に消滅しつつある。これに気付きもせず、五〇億人の人間をサイバースペースによって集約しようとしている」。これはマイケル・クライトンの『ロスト・ワールド』の一節である。IT革命には、このような爆弾も潜伏していることを銘記する必要がある。